

氏 名	すが はら むつみ 菅 原 睦
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 510 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	ウイグル文字本『聖者伝』の研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 庄 垣 内 正 弘 教 授 濱 田 正 美 教 授 佐 藤 昭 裕

論 文 内 容 の 要 旨

イスラム化以降の中央アジア・チュルク語文章語の発展は、イスラム圏における主要な文字であるアラビア文字を使用しつつ、15世紀のいわゆるチャガタイ語においてひとつの頂点を迎える。ペルシア文学の強い影響下に、この言語を媒体として産み出された宮廷文学作品は、その後長く人々に愛好されることとなった。その一方で、同じ15世紀中央アジア（ティムール朝時代）において、イスラム以前の伝統の象徴とも言うべきウイグル文字の使用があったことが知られている。このようなイスラム時代におけるウイグル文字使用の動機や背景については、いくつかの興味深い見解が提示されてはいるものの、いまだ不明の部分が多いと言わざるを得ない。また、これらウイグル文字で書かれた文献がイスラム時代中央アジア・チュルク語の研究において占めるべき位置についても、これまで十分な議論はなされておらず、そのためこれらの文献固有の言語的特徴や、それらが反映する言語状況についての考察も極めて不十分な状況にある。

本稿は、このようなイスラム時代中央アジアのウイグル文字文献の中でも最も大部なもののひとつでありながら、今日までテキスト・エディションが刊行されていない、従ってその言語的な特徴も詳しく知られていない、15世紀にヘラートで筆写された『聖者伝』を取り上げ、その翻字・転写によるテキストおよび訳注を提出することを第1の目的とする。その際に、これがペルシア語からの翻訳テキストであることに注目し、本文の確定や解釈において、ペルシア語原本との対照から得られる情報を最大限に活用した。

このテキストと日本語訳、註は本論文の第4章を構成する。一方、得られたテキストがそのペルシア語原本とどのような関係にあるのかを分析した結果、このテキストはペルシア語原本からさまざまな箇所を抜粋し再構成してつくられた一種の「抄訳」という性格をもっていることが明らかになった。それと同時に原本の全体的な構成は維持されており、また原文中の押韻散文を訳文でも再現しているなどの興味深い特徴も見られる。これらの分析は本論文第3章の前半に位置しているが、そこではあわせてこの写本の成立過程についても検討が加えられ、この写本がアラビア文字で書かれた訳稿からウイグル文字による別の訳稿を経て現在の写本に至ったという推定が示されている。一方、第3章の後半は得られたテキストの言語特徴の分析にあてられている。音韻面、形態・統語面および語彙面での主な特徴が記述され、それらが15世紀のチャガタイ語文献や、14世紀のホラズム・チュルク語文献など時代的・地域的に近接する他のチュルク語文献と比較されている。なお統語面や語彙面の分析が、やはりペルシア語原本との対照を踏まえているのは言うまでもない。そのような分析の結果、このテキストの言語が古典期チャガタイ語（15世紀後半）よりも、前古典期チャガタイ語（15世紀前半）やホラズム・チュルク語（14世紀）との類似を示すことが確認された。そしてその類似点は、時代的に古い特徴ばかりではなく、むしろ地域方言的な特徴と思われるものをも含んでいることが特に注目される。このことはウイグル文字本『聖者伝』が作成された言語的環境についての手がかりを与えるばかりでなく、ペルシア語からチュルク語への翻訳活動そのものの歴史を考える上でも有益な情報を提供するものと言える。

上の議論に先立って、序論としての性格をもつ第1章では、イスラム時代中央アジア・チュルク語文献の研究について、その現状と全般的な問題点に触れている。また第2章では、『聖者伝』がその中に含まれるティムール朝時代ウイグル文字

文献が概観された後、その表記の特徴が論じられている。まず、ティムール朝時代のウイグル文字は、イスラム以前の「伝統的」ウイグル文字とは異なる表記の原理によっていたことが明らかにされた。そしてその違いは、伝統的なウイグル文字の字形を素材としながらも、言語を書き表わす際の発想においては、アラビア文字表記の考え方による再解釈を経ていることによって説明されることが可能である。従ってティムール朝時代のウイグル文字使用を、かつてのウイグル文字の伝統をそのまま継承するものと見ることはできない。また現存する文献に見られる表記法がすべて同一のものではないという、従来指摘されていなかった事実に着目するならば、ウイグル文字の伝統からより大きく離れている文献は、そうでない文献に比べてアラビア語・ペルシア語起源の借用語をより規範的な形で綴るという傾向が認められる。このことは、アラビア文字の表記原理に従うようになって行くその過程における、いくつかの異なる局面の現れであると解釈されよう。一方、しばしば主張される、モンゴル支配とウイグル文字使用との関連については、状況証拠からは十分その可能性があるものの、表記法に見られる特徴をモンゴル支配と関連づけて説明することはできない。従って現時点で何らかのはっきりした結論を得ることは困難と判断され、今後さらなる研究が必要であると考えられる。

論文審査の結果の要旨

イスラム時代中央アジア・チュルク語文献は、その大部分がアラビア文字で書かれているが、ウイグル文字による文献もいくつか遺されている。特に15世紀のヘラートやサマルカンドといった都市では、文学・宗教テキストのウイグル文字写本が作られ、その中にはかなり大部のものも含まれる。これらは古くから研究者たちの関心を集めており、ファクシミリや翻訳の刊行も行われてはいる。だが実際の研究は、古代ウイグル語やアラビア文字で書かれたチュルク語文献と比べると大きく立ち遅れている。

本論文が対象とするウイグル文字本『聖者伝』は、このようなイスラム時代ウイグル文字文献を代表するもののひとつであり、同時に最も大部の文献のひとつでもある。ペルシア語原典からの翻訳であるこの文献は、1890年にパリで影印本が出版され、またその前年には Pavet de Courteille によって全体の仏訳も刊行されている。しかしテキスト・エディションは発表されておらず、その言語特徴も明らかにされていない。

本論文（和文 A4 判656頁）はこの『聖者伝』のテキストの提出および言語特徴の記述を主な目的としている。全体は4章から構成されている。導入部的な第1章「イスラム時代中央アジア・チュルク語文献研究の現状」では、イスラム時代ウイグル文字文献の重要性と、ペルシア語からの翻訳文献研究の意義が指摘されている。この二つはそのまま本論文全体の基本的な立場と重なる。すなわち、『聖者伝』のウイグル文字文献という側面と、ペルシア語翻訳文献という側面とに注目した研究と評することができる。

第2章は、『聖者伝』が含まれる15世紀ティムール朝時代のウイグル文字文献の特徴を概観する内容となっている。特にその正書法が、古代ウイグル語のものとのどのように異なっているかが、実例をあげて具体的に示されている。それによればティムール朝時代のウイグル文字正書法は、「伝統的なウイグル文字の字形を素材としながらも、言語を書き表わす際の発想においては、アラビア文字表記の考え方による再解釈を経たものであった」とされている。さらに現存する文献の間に見られる綴りの特徴の違いも、このような再解釈の過程における「脱ウイグル化」の程度の違いとして説明されている。15世紀ウイグル文字文献の正書法に関するこれらの指摘は妥当なものであり、また本論文の独創的な点として評価できる。さらに論者は、この時期のウイグル文字使用の背景についても触れ、従来主張されている、この文字が実用的価値をもたなかったという考えや、モンゴルを通じて導入されたという考えを退けている。

第3章は「ウイグル文字本『聖者伝』について」と題されている。ここでは、この文献の概要の紹介に続き、ペルシア語原本との比較と、言語特徴の記述が試みられている。ペルシア語原本との比較は2種類の刊本を用いて行われており、全体の構成や語句の比較を通して『聖者伝』の翻訳テキストとしての性格が論じられている。論者の結論によれば、ウイグル文字『聖者伝』は、「ペルシア語原本から抜粋・再構成した「抄訳」という性格のもの」として位置づけられている。一方で、訳出の際にはいくつかの系統の異なるペルシア語テキストが混合された可能性が示唆されている。確かに、論者によって参照された2種類の刊本やそれらに示された校異の範囲からは、ウイグル文字テキストともっともよく一致するペルシア語テキストを確定することは困難である。とはいえ論者の結論はなお予備的なものであり、今後ペルシア語諸写本の精査を含め

たさらなる検討が必要であろう。言語特徴に関しては、表記法、音韻、形態、統語、語彙の各面についてそれぞれ論じられている。特に形態や語彙面の特徴からは、このテキストの言語が古典期チャガタイ語散文の言語よりも、前古典期チャガタイ語やホラズム・チュルク語に近い言語であることが実証されている。さらに、ペルシア語からの最初期の翻訳作品である14世紀の『フスラウとシーリーン』や『チュルク語による薔薇園』との間に見られる言語的な共通点にも着目し、それらが『聖者伝』テキストが作られた言語的環境を反映するものであるという見解を示している。このように、本章の議論は単なる言語特徴の列挙に留まらず、チュルク語—ペルシア語関係という視点からの考察を含む点に大きな特色がある。

最後の第4章は『聖者伝』テキストと日本語訳および註にあてられている。テキストの提示にあたっては、ウイグル文字写本の特異な綴り字を再現するために文字転写と音素転写を併記し、ウイグル文字に部分的に添えられているアラビア文字は転写の行に太字で示すという、論者独自の工夫が認められる。註は主として言語面での注解で、チャガタイ語やホラズム・チュルク語文献からの豊富な典拠をはじめ、必要に応じてペルシア語原文の対応箇所を挙げるなどの配慮がなされている。また Pavet de Courteille による仏訳に見出される不備もいくつか指摘されている。

本論文の1章～3章までの解説はそう長くはないが、『聖者伝』およびイスラム時代ウイグル文字文献の性格を的確に論じている。また、第4章のテキストは今後「菅原テキスト」として一般に使用されることになるであろう。この大部の文献をここまで精緻に研究した論者の努力には敬意を表したい。ただ、テキストに索引が付されていたらなお利用価値が高まったといえる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2006年2月28日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。